想像された自然と想像という自然

漫画を哲学する試論

佐金　武

1．おかしな漫画実在論？

多くのコミック・ワールズが存在していて、我々の現実世界は、そのひとつに過ぎない ——— そういえばおそらく、漫画フリークスからさえも、冷笑を買うことになるだろう。しかし、これは提案であり、漫画がなぜリアリティーをもつのかということの文化論的説明はさしあたり問題ではない。漫画作品のもつメッセージやそれの描く世界を哲学的きまじめさで受け止めること、もしかすると漫画のそのような読み方はできるかもしれないし、そうであればその何が面白いのか、このことを例示したいのである。このような漫画実在論（コミック・リアリズム）が、おかしな実在論（コミカル・リアリズム）と映るなら、それでもかまわない。面白いならむしろそれでよいと思う。

漫画を哲学的観点から論じた永井均氏による『マンガは哲学する』（講談社 SOPHIA BOOKS　2000 年）が、本論のお手本となっている。そこに新たな一章を書き加えるといっても、私の意図からさほど遠くはない。（立場の異同は別問題である。）わずかな違いがあるとすれば、本論では、哲学的マンガの紹介というよりは、漫画の哲学的な読み方を示すというスタンスをとる。

さて、我々のテーマは、想像と自然である。あまりにも大雑把だが、これらを論じることこそ、哲学の古くて新しい最重要課題である。想像と自然の本性をめぐっては、個別に論じることができるだろう。しかしながら、より興味深くて難しい問題は、両者の関係とは何かということに由来する。たとえば、自然は想像のうちにあるのか、あるいはそれを超えるのかどうか。また、想像し得ないものの存在を予感するとは如何なることか。さらに、想像されたものが自然であるというのはどのようにしてか。以下三つの作品を読むにしたがい、こうした問いに思いを致すことになるだろう。

2．『魔女』を読む：自然は我々の言語より豊か？

言語（より正確には、概念としての「言葉」）により想像されたもの（古い言い方では、「観念」）について、それが自然であるとかそうではないというのはどういうことだろうか、この問いからはじめよう。想像されたものが自然であり得るというためには、当然それなりの条件が課されねばならないだろう。そのためにはまず、論理的に無矛盾でなければならないといわれるかもしれない。それに加わる更なる条件付けに関して、哲学者の見解は諸説様々である。たとえば、成立しうるものは明晰判明に思い抱くことができるのでなければならないとする、デカルトの「明証性の規則」は有名だ。いずれにせよ、便宜上、このような問題領域を形而上学についての認識論と呼ぼう。そこでは、言語的にあるいは心に思い描かれるという仕方で接近可能なものの内部で、自然とはどういうことかが問われているからである。ここで扱われる「自然」が、我々にとっての自然ということ以上を意味しないことに注意したい。

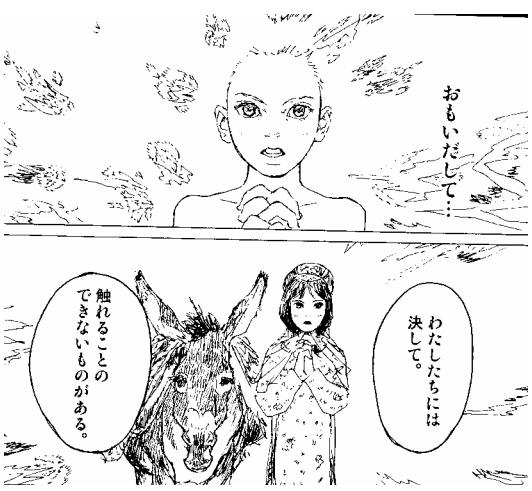
ところで、いわば逆向きの、あるいはメタ的な問いもまた存在する。すなわち、想像ということそのものが自然か不自然か、また自然であるとすればどの程度そうなのか、という問いである。前段の問題意識に対比して、これを認識論についての形而上学と呼んでもよいだろう。そこでは、本当の自然が、何らかの概念的な手段を通じて捉えうるのかどうかが問われているからである。この意味での「自然」は、我々の思考内容であるそれとして考えられる必要は全くない。しかし、哲学的に見れば、そもそもこのような問題領域が設定できるのかどうかということ、それがまさに論争の的であるという点で、これは特異な問いである。たとえば、バークリーは、その問いの不可能さを論じた。

これらの問題に照らして、五十嵐大介氏による『魔女』の「Petra Genitalix」と「Spindle」という作品を読んでみたい。そこにはそれぞれ、ふたつの強いメッセージが編み込まれている。「Petra Genitalix」には、たとえば、次のような台詞が現れる。「どうして本を読んではいけないの？」と問う見習いのアリシアに答えて、魔女

五十嵐大介 「PETRA GENITALIX」

『魔女 第２集』（小学館 IKKICOMIX） 2005 年 P. 91

のミラは「あんたには経験が足りないからよ。“体験”と“言葉”は同じ量ずつないと、心のバランスがとれないのよ」という。さらに、物語のクライマックスでは「いちども空を見たことがない人が「晴れた空は青い」と言ったら、言葉は間違ってなくてもそれはウソなんだわ」とアリシアは気付く。ここに見出される、メッセージは、経験される自然に対して言語が空転してしまうことへの警告であろう。



五十嵐大介「SPINDLE 後編」

『魔女 第1集』(小学館 IKKICOMIX) 2004年 P. 112

この自然に対する謙虚さにはしかし、もう一つの物語「Spindle」の主人公シラルによる祈り、すなわち次のような自然への絶対的信頼が根底にあるのかもしれない。彼女は、世界の秘密を手にしたというニコラに対して、「言葉で考えるあなたは言葉をこえることは考えられない。あなたより大きなものをあなたは受け入れることができない。あなたはあなたの世界を広げることができても、あなたの外に出ることはできない。私たちの手が届くのは、私たちの世界の中だけ」、「思い出して！私たちには決して。触れることのできないものがある」と訴える。我々が到達しうるものは、どんなに拡張されてもその言語のうちに留まるけれども、この自然という世界には、それでは不足するものが常に存在するのだという無条件の信頼をここに見いだすことは難しくない。

「Petra Genitalix」は、我々のいう形而上学についての認識論に対して、次のような解答を用意しているように思われる。すなわち、我々の思考内容となりうるような、言語的にあるいは概念的に把握可能なもののなかで、自然なものとは、それが経験されたところのものである、という解答である。しかし、このことは、期待される答えとしては強すぎるかもしれない。誰かが何かを経験したという現に成立している事実に訴えねばならないとする点で、想像するということそのものを不自然なものとみなすことにつながるだろうからだ。しかし我々は、この主張を希釈して、次のようにいってよい。す

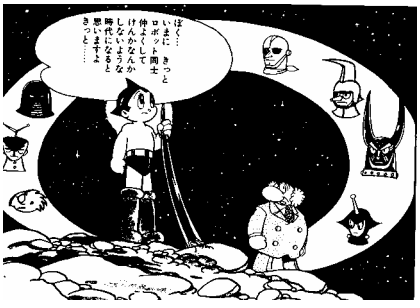
なわち、自然に想像されたものとは、それが可能的に経験されうるものであると。

他方、「Spindle」では、言葉によっては決して触れることができないものがある、といわれている。これは、本当の自然が言語あるいは概念によって不足なく捉えるうるものかどうかという、前述の認識論についての形而上学的問いに対して、否定的な答えを与えるものであるように思われるのである。つまり、自然は可能的なものを含む言語的または概念的な経験の全体を凌駕する、というのである。

こうしたふたつの自然観は、どのような関係にあるのだろうか。「Petra Genitalix」から読みとれるメッセージは、我々にとって自然なもの、すなわち経験可能なものは、言語を介して想像可能でもあるだろうが、その逆は成り立たないということであった。さらに、「Spindle」では、本当に自然なもののすべては我々には到達不可能、つまり想像することさえできないと言われていた。これは、我々には想像すらできないような、本当に自然なものが存在するという主張と同値である。つまり、本当に自然だが、原理的に経験できないようなものが存在することになる。ここから、ふたつのことが帰結する。すなわち、我々にとっての自然ではないような本当の自然が存在するということ、しかもそれについての観念すら我々は持ち得ないということが帰結するのである。

3. 『プルートウ』を読む：想像できないものはいかにして予感されるか？

さて（バークリーには失礼ながら）、本当の自然と考えられているものを、何らかの実質的な内容を伴った観念として我々がもたねばならないというのではない限り、我々が想像することすらできないようなものが存在するかもしれないという事態は、矛盾なしに想像可能であろう。しかし、ここで生じる新たな問題は、このような事態を我々が予感できるというのはいかにしてかということである。



手塚治虫 「地上最大のロボットの巻」

手塚治虫漫画全集 233『鉄腕アトム 13』(講談社) 2005 年 P. 184

そこで、この予感について、アトムと共に考えてみたい。いうまでもなく、アトムとは、手塚治虫氏の想像から生まれた最も愛すべきキャラクターの「一人」である。アトムだけでなく、「地上最大のロボット」に登場するロボットたちは皆、人間以上に純粋な「心」をもつもののように、生き生きと描かれていた。

ところで、我々が取り上げたいのは、浦沢直樹氏により新たな息吹を吹き込まれた、もう一人のアトムである。『プルートウ』と題されたこの漫画は、前述の手塚作品のミステリー仕立てのリメイクで、ファンにとってはたまらない挿話がいたるところにちりばめられており、オリジナルからのメッセージを保持しつつ、姿形の上でもまた心的ふるまいの面でもより人間に近い、洗練されたロボット像が描かれている。我々の身体もまた機械の一種であると考えるならば、そこに登場するロボットたちが人間的な感情を少なくとも機能の面でよく理解しているということから、我々と彼らの間にほとんど区別などないように思われる。たとえば、アトムは、パフェの味というような語彙を我々と共有していて、彼はこれを通常の仕方で用いることができるのである。

しかし同時に、我々とアトムとの決定的な違いについても示唆されている。心の機能的な観点から見れば、アトムは本当においしそうにパフェを頬張ることができるというのは確かなのだが、彼には意識（あるいは、その重要な一部）が欠けており、パフェの味そのものを感じることができない（つまり、パフェの「クオリア」というべきものをもつことができない）と想定されているのである。しかも、アトム自身もそのことに自覚的であるように描かれている。

浦沢直樹　手塚治虫 「PLUTO」

『PLUTO 002』(小学館 ビッグコミックス) 2005年 P. 15

仮定により、アトムには味覚が欠けているのだから、自分の知らないのはこのこれである、と言うことはできない。加えて、このこれとは、おいしそうに食べることができるという機能によっては同定できないものである。もちろん、我々の実践からいえば、おいしさの機能とこのこれとが一致しているということは理に適っている。しかし、概念として考えるなら、機能とクオリアとは別物であるといえる。泳ぎ方を知っているということは、すなわち泳ぐとは

何かを理解していることだが、これと類比的に、おいしそうに食べる仕方を知っているということは、おいしいとは何かを理解することであるとはいえないだろう。

アトムにとってのこうした事態は、本当の自然ということに直面するときの我々とよく似ている。どちらの場合も、問題となるこのこれや本当の自然を、実質的な中身を伴った観念としてはもっていない。それらに接近する唯一の方法は、私にはそのありありとした観念が欠けているが、にもかかわらず存在しているかもしれない何ものか、という仕方での記述である。このこれや本当の自然というのは、アトムや我々にとっては、単なるラベルに過ぎない。このこれが存在するとか存在しないとかを直接問題にできるのは、アトムについて考える我々の方である。同様にして、我々が想像できない本当の自然が存在するとかしないとかということを直接に捉えることができるのは、いわば神である。アトムも我々も、そのような何かが存在するかもしれないし、しないかもしれないと予感することはできても、ありありとした仕方でそれを見いだしたとは言えない。

さらにいえば、存在するといわれる何ものかが、このこれや本当の自然であるということは保証されておらず、アトムはクオリアらしきものを、我々は本当の自然らしきものを予感しているということができるだけである。アトムが、「僕にはパフェの味が欠けている」といってもそれは、「アトムにはパフェの味が欠けている」という我々の言明と同じことを厳密には表現してはいない。もちろん、彼が私を指して、「僕にはあなたがパフェの味と呼んでいるものが欠けている」というなら、彼は先の私の言明と同じことを言っている。しかし、問題は、「私がパフェの味と呼ぶもの」が、まさにパフェの味であることの見知りである。アトムにとって、パフェの味は端的にないのである。以上のことは、我々と我々がそれについての観念を持ち得ないとされる本当の自然についても、同様に論じることができる。我々は、「我々には想像し得ないものが存在するかもしれない」ということはできるが、その様な仕方で言及される本当の自然とおぼしきものは、たまたま存在しないのではなく、そもそも存在し得ないのである。要するに、このこれや本当の自然の方は、それが存在するものにとっては既に存在しており、存在しないものにとっては、どんなに想像力を豊かにして探しても最終的な存在物として見つかるようなものではない。アトムや我々にとって許されていることは、何ものかの予感であって、単にこのこれや本当の自然が存在する・存在しないという主張ではないのである。

4. 『蟲師』を読む：異世界の科学とはどんなものか？

さて、我々の自然の問題、つまり形而上学についての認識論へと話しを戻そう。我々は、味覚の「このこれ性」を知っているとはいえ、自分たちが用いる言葉のそれぞれが対応する実質的な意味のすべてを知っているわけではない。つまり、かくかくしかじかであるような何ものかとして考えることができるが、必ずしも直接的な仕方でその言葉の意味を把握しているのではないようなものが、言語的には表現可能である。しかし、そうした仮説的な存在物のすべてが、自然であるはずはない。さもなければ、この現実では、あらゆることが可能となってしまう。それゆえ、何か自然なもの、自然に対応するものを表現すると考えてよい正当な理由について再考する必要があるだろう。

「Petra Genitalix」の教えるところでは、その第一の基準は、経験であった。緩められた第二の基準では、実際に経験するものだけでなく、可能的に経験しうるものを含んだ。しかし、これだけでは十分ではない。科学でさえ、直接に知覚できないものの存在を要求することがしばしばある。観察の限界を超えるミクロな粒子、また絶対的な時間や空間といった理念的な存在者の仮定がそうである。そこで、第三の基準として、直接に知覚可能ではないが、そうした存在者を措定することで、知覚可能な結果を説明できればよい、ということが考えられる。もちろんここには、存在論の経済的要請が差し挟まれるべきだ。多くの知覚不可能なものからある現象を説明する理論に比べて、より少ないものによって同じ現象を同じ程度うまく説明する理論の方が優れているといえる。

こうした何らかの基準を設ければ、オカルト的なものと自然なものとの区別ができるようになるかもしれない。ただし、その際注意すべきは、オカルト的だとされるものが存在しないといわれるのは、それが実在を表現していないからではなくて、以上のような合理的な基準に照らして、それらが存在するとする正当な理由が見当たらないからである。実際、我々の経験的な知識の段階に応じて、あるものがオカルト的だとして切り捨てられたり、逆に一見オカルト的だと思われていたものが自然なものであったということが判明したりする、ということがありうる。我々の科学が現在の形まで発展するためには、何らかの合理的な基準に加えて、世界のあり方を探究しなければならなかった。

もし、世界がこのようにではなく、違うあり方をしていたとしたらどうだろう。漆原友紀氏の『蟲師』の世界は、そのような可能性を描いているように思われる。動物でも植物でもなく、無数の生命(そのもの);原生体である蟲。確かに、蟲師の見る世界は、少なくとも我々にとって馴染みがあるような意味での科学的な世界ではない。なかでも、「瞼の光」

という作品では、第二の瞼を閉じたときに現れる本当の闇、異質な光のエピソードが語られ、蟲たちの世界が、深い自然として描かれている。それはときに、ある種の現象として現れ、人の幸や不幸に介入することもある。しかし、我々はあまりにも我々の光に慣れているので、ふたつめの瞼の閉じ方を忘れてしまっている。他方、蟲師ギンコは、深い自然と現象とを仲介するものであり、蟲を見聞き触れ、それと対話することができる。こうして彼は、処置法を見いだし、解毒剤を利用し、策を講じて、様々な出来事を切り抜けていく。

漆原友紀 「瞼の光」

『蟲師 1』(講談社 アフタヌーン KC) 2000 年 P. 168

蟲がある人には知覚可能なものであり、それが作用する仕方を合理的に説明できるような世界が、現実のものであると想像してみよう。そのときには、我々は異なる科学を採用していたはずである。それは、この現実世界から見れば、幽霊学にしか見えないものかもしれない。だがやはり、それは、三つの基準を含む何らかの要請を満たす限りにおいて、その現実世界での科学ではあり得る。だから、蟲師は、その世界では、名医ブラック・ジャックのごときもの、それ相当の身分をもつものである。

科学とオカルトの線引きの問題は、「科学」に要請される基準と現実世界のあり方の両方に依存する。我々の科学も蟲の科学も、ある観点からすると、共に「科学」でありうる。我々の科学がこのように発展を遂げ、蟲の科学でなかったのは、前者をこの世界の記述として我々が受け入れたということに他ならない。ならば、世界のあり方を探求するだけで、この科学と非-科学とを区別できるのではないか、と考える人もいるだろう。私個人の意見を述べれば、世界のあり方の探求にも、合理的な基準の要請が考慮されるべきであるから、これらは別個ではないと思う。ここで、我々によって想像された自然と我々の想像の自然さが交差するように思われるのだが、さてどうだろうか。

5．終わりに：ポップ・カルチャーとしての漫画の可能性

以上我々は、自然と想像をめぐる様々な哲学的問題に触れつつ、三つの漫画作品を横断的に論じてきた。『魔女』のふたつの物語から、形而上学についての認識論と認識論についての形而上学のそれぞれをめぐる、あるメッセージを受け取った。後者の問題については、我々には想像できないようなものが存在するかもしれないという命題を、アトムとパフェを楽しみつつ考えた。そこでのとりあえずの結論は、想像不可能なもののありありとした感触はなくとも、そうしたものの存在を予感することはできるということだった。しかし、このようなものすべてを自然と考えることはできず、こうして我々は、形而上学についての認識論へと戻ることになった。蟲師の世界で我々が学んだことは、何が自然なのかということは、合理的な基準と世界のあり方の両方に依存するということであった。世界のあり方の探求には、科学的方法が用いられねばならないが、まさにその方法が何なのかということを考えねばなるまい。これは、近年哲学で盛んに論じられてきた自然主義のテーマへとつながるものである。それについては、個人的な見解として、想像された自然と想像の自然さとは不可分であることを示唆しておいた。つまり、めまぐるしい科学技術の発展によって明かされてきたもの、明らかにされつつあるものを正しく理解するためには、我々の想像という営みについて考察しなければならないと考えているのだが、これを詳細に論じるには紙面を改めなければならない。

最後に、我々の分析の依拠してきた立場、すなわち漫画実在論について、一応の自己評価を与えておきたい。私は、哲学を高尚なものとして、漫画を下賤なものとして、それらに固有の場所を指定したいとは思わない。もっとも、漫画一般が、哲学ではないことは明らかである。第一に、漫画の存在意義は、哲学することにあるわけではない。第二に、非-哲学的な漫画も、事実多い。第三に、学としての哲学には、いきなり素手でつかむことができない議論がたくさんある。しかし、それらは共に、我々の想像力によって起動するこの世界についての素朴な関心から始まっている。そして、漫画は、良識や浅はかさの渾然一体となった人間的な自然のなかでその感度を発揮し、知的興奮を呼び覚ますことがある。それが、今やメイン・カルチャーである漫画の、ポップ・カルチャーとしての重要な特性のひとつであり、漫画実在論のおかしさなのである。[註記]

[註記] 本論における漫画の引用は、「報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲」であり、慣例に従い、著者および出版社の許諾を得ていない。

（哲学修士課程）